

『魂のささやき』より

10. 母^{はは}より

この世^よは僅^{わず}か夢^{ゆめ}の世^よでございます。

何卒^{どうぞ}本気^{ほんき}になりて人様^{ひとさま}にお聞^きかせ下^{くだ}さい。

口^{くち}で言^い

うて聞^きかしても、お念仏^{ねんぶつ}が浮^うかばぬ様^{よう}では面白^{おもしろ}くありませんから、又^{また}御座^{おざ}の後^{のち}に残^{のこ}った人^{ひと}に、どうか、どうお聞^ききなされたか、と尋^{たず}ねて上^あげて世間^{せけん}の話^{はなし}に移^{うつ}らぬ様^{よう}にして下^{くだ}さい。

ある同行^{どうぎよう}が、如何^{いか}にお説教^{せつきよう}が上^{じようず}手^{ひと}と人^{ひと}にほめられても、お念仏^{ねんぶつ}も浮^うかばぬ、お説教^{せつきよう}がすめば

直^すぐに世^よの話^{はなし}をしたり、私^{わたし}の役目^{やくめ}はもうすんだと申^{もう}す様^{よう}な素振^{そぶ}りをしたりするようではどう

も面白^{おもしろ}くありませんと 申^{もう}されましたが、お念仏^{ねんぶつ}が少^{すこ}し数^{かず}が多^{おほ}く出^{いず}れば称名^{しょうみ}正因^{しょういん}の異安心^{いあんじん}

じやと言^いわれる人^{ひと}もあるが、出^でないのは貰^{もら}い物^{もの}がたりないからです。それから安^{あん}心^{しん}したの

がお領解だの、疑い晴れたのがご信心だのと、型ばかり教える人がありますが、あなたは私にどうお聞かせ下さいます。十八願のおゆわれを手短にお聞かせ下さい。

親切な親ではないか。子供を仏にしよう永遠に生かそうの一念から、身の衰えるも忘れ

て働き、而も信仰も一匹の馬がくるえば千匹の馬がくるう様に、導く針が直しく行かねば続

く同行の糸も曲がる様に、真の親に逢えよ、真の親に逢えよ自信教人信じゃで、真実信心

には必ず名号を具するのじゃぞ、名号の出ない様なものは本真者ではないぞと、誠めてくれ

る大善知識が三千世界に何処にあらうか。私を絶対の親に逢わしてくれた親こそ、阿

弥陀様の化現じゃ、私の輪転無窮を哀れんで、親子の縁を結んで眼を醒さしてくれた権化の

人じゃ、と仰がずにいられない。合掌せずにいられない。第十八願の味を、手短く味わ

いますれば、「救われた嬉しさには、称えずにはいられません」

11. 右返事

先日はお手紙有りがとうございました。お変わりなく皆様がご辛抱なさいますので、安心

致しました。八幡の方は不幸続きで大積の祖母さんの百力日の後に芳子が、又百力日位で

佐賀の祖母さんが死なれましたが、之が人生でございましょう。誰が早く行くやら、出て

いくまでの命ですから、根限り仏法の為に働いて置かねばなりません。

何時も何時も御親切に私の信心はどうであらうかとご心配下さる、有難うございます。十八

願の味を一口で言えと申されましたが、「救われた嬉しさには、称えずにはいられません」

とお答え申します。

お母様、お念仏は私の往生の決まった証拠では有りますが、親の心即ち信心が届くまで

は、唯になったのではありません。御文章にも「口にただ称名念仏ばかりを称ふる人

はおほようなり。それはおほきにおぼつかなき次第なり」ともあり、親鸞聖人様は

「真信心には必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり」と仰せられ

てありますが、なんでもえー念仏せよ、そのうちには何とかなろうと言う念仏は、二十願

の念仏でおぼつかない、ひよつとの出て来る念仏であります。名号には必ずしも、願力

の信心を具せざるなりで、称えてはいるが、唯の味を知らないで、自分で助かると思っている

のです。うわつらだけ思わして貰っている人で、五劫思惟の本願は私一人の為じやと

言う、決定心はその人には有りません。

而し罪惡のかたまり、不実一杯の私、真実になり得ない私に、かかり果てて下さる如来様

の絶対の不思議に眼の覚めた時、唯の唯とは私の罪惡の有りつたけかと驚いた信の一念

に、仏凡一体、機法一体の味を得たのを仏智満入とも、信心歡喜とも言いますので、真実

信心には必ず名号を具する、仏のお手元（名号）が私に届く（信心）が口に出る

(称名)

名号のままが信心、信心のままが称名で、真実功德大宝海の名号の私の胸に満

ちて大信海となり、弥陀の廻向の御名なれば功德は十方に満ち給うと、称名が出て行くので

すから、救われた嬉しさ(信心)には、称えずには(称名)いられませんと、お答えす

るのです。

八幡にも 三十年五十年と聞いてはいるが、「この様ではひよっと」の同行や、薄紙一重

が晴れ切れんで困っている同行や、あの人の様に喜べないと言う同行や、はつきりしそうな

ものと言う同行や、色々大病をかかえた同行が沢山居られます。

機を見るな手間がかかると教えられる善知識も有るが、機を見れば手間がかかり見ねば

早いと言われるが、おかしな本願があればあるもの、見れば遅い見ずにいけば早いと言うの

は、一生懸命になれば遅いが、知らん顔していれば早いというのと同じ事、その様なごまか

しで参る様なお浄土ではありません。 今度の往生は御教化でぬすくって、そう思っ

て参る

お慈悲ではなく實際問題です。心の底から唯にならねば真実に救われたものではありません。機を見ずに頂いたと思う同行は五十年間いても、氣持の悪い薄紙一重ひよつと、あれ

でもなあ、がのきませんが、照らさるる機を見て進んだ者は、この不実一杯の機にかかり果てた本願じゃと、真剣に進みますから早いになると只の一席位で、踊り舞いして唯の味を体験致します。その時に十八願の味を聞き開いて、救われた嬉しさには称えずにはいられ

ませんと、飛び立って仏凡一体の妙味を得るのであります。凡夫は何も知らんでもよい、

もやもやの起こるなりが唯じゃなど教える知識もあります、その人はまだ自分が晴れて

いないので、感じたのを信心と思つている人です。痴無明や疑無明の区別がはつきり判ら

ないから水際を鮮やかに体得出来ないのです。

親の誠が届いて晴れなくて何時晴れる時が有りますか。聞き得た一念に疑いの曇り

は、さらりと晴れ渡り、重荷おろした味、唯じゃ唯じゃと踊ります。親の若不生者の

誓^{ちかい}を貰^{もら}った人^{ひと}なら 此^{この}世^よから体^{たい}徳^{とく}を言^いえ 正^{しょう}定^{じょう}聚^{じゅう}の菩^ぼ薩^{さつ}、決^{けつ}定^{じょう}必^{ひつ}定^{じょう}、極^{ごく}樂^{らく}のあ^ととりの
自^じ覺^{かく}がな^くてど^うし^ます。

一、至^し心^{しん}信^{しん}樂^{らく}欲^{よく}生^{しょう}我^が國^{こく}とある信^{しん}樂^{らく}は、疑^{うたが}い晴^はれて曇^{くも}りのない、ひよつとのない、疑^ぎ蓋^{がい}雜^ざわ^る
事^{こと}なしの、明^{あき}らかな、親^{おや}と一^{いつ}体^{たい}にとけあ^つた味^{あじ}な^なです。

二、信^{しん}心^{しん}歡^{かん}喜^ぎ、私^{わたし}の儘^{まま}が南^な無^む阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}とは、あ^らあ^ら心^{こころ}得^え易^{やす}い安^{あん}心^{じん}や、行^ゆき易^{やす}い浄^{じょう}土^どや、私^{わたし}
の行^ゆく处^{ところ}は皆^{みな}お浄^{じょう}土^どと^いう、広^{ひろ}い世^せ界^{かい}に飛^とび出^だした味^{あじ}。

三、明^み信^{よう}仏^{しん}智^{ぶつ}とは、大^{だい}經^{いきやう}のお言^{こと}葉^はで明^{あき}らかに仏^{ぶつ}智^ちを信^{しん}ずるとは、罪^{ざい}惡^{あく}に繋^{つな}が^れ、動^{うご}かれぬ私^{わたし}
にか^かかり果^はてた本^{ほん}願^{がん}なら、私^{わたし}が参^{まい}らで誰^{だれ}が参^{まい}るのか。五^ご劫^{こう}思^し惟^{ゆい}の本^{ほん}願^{がん}は私^{わたし}一^{ひとり}人^{ひと}の為^{ため}じや。

私^{わたし}は正^{しょう}定^{じょう}聚^{じゅう}不^ふ退^{たい}に住^すさして頂^{いた}いでいる。仏^{ぶつ}智^ちの全^{ぜん}体^{たい}が私^{わたし}の妄^{もう}念^{ねん}に満^{まん}入^{にゅう}した時^{とき}で、明^{あき}らかに届^{とど}
くのじやで闇^{やみ}は一^ち寸^つも有^あり^ませ^ん。

四、彼仏名号 ひぶつみょうごう 歡喜踊躍 かんぎゆやく 乃至一念 ないしいちねん とは名号を聞き開いた時は、手の舞い足の踏む処を知

らず、私が弥陀やら、弥陀が私やらの 信の一念の処で、不可称 ふかせつふかしぎ 不可説不可思議

の味わい、苦抜けのした世界。

五、曇鸞大師は、弥陀の名号は衆生の一切の無明の闇を破し、衆生の一切の志願を満足せし

め給うと説いていらるるが、うす紙や、ひよつとや、「とは言うても」の残っている間は、

真実の如来に救済されたものではありません。手を挙げてても脚を動かしても、私の儘が

南無阿弥陀仏で、疑いの雲霧は晴れて往生の一大事を解決さして頂いた喜びは筆や口では顕

されませんから、聖人様は「心も言葉もたえたれば不可思議尊を帰命せよ」と申されたので

す。

六、善導様は、深心を説明して深く信ずるの心なりと言ひ、廻向発願を釈して此の心深信せ

ること由し金剛の若し。

七、正信偈しょうしんげには、行者正ぎやうじゃまさしく金剛心こんごうしんを受けともあり。

八、ああ弘誓ぐぜいの強縁ごうえんは多生たしやうにも遇もうあひ難がたく真実しんじつの淨信じやうしんは億劫おくこうにも得難えがたし、淨きよかな信心しんじんは汚よごれはなく、ひよつとのない事こと。

九、他力至極たうきしごくの金剛心こんごうしん、一乘無上いちじやうむじやうの真実信海しんじつしんかいなり。（愚禿鈔）

十、たちどころに他力撰生たうきせつしやうの旨趣ししゆを受得じゆとくせり。（御伝鈔）

十一、大悲だいひの願船がんせんに乗じやうじて、光明こうみやうの広海こうかいに浮うかびぬれば、とは名号みやうごうと一体いつたいになり苦拔くぬけがして、何時いつもほやほやしている姿すがたなのです。

十二、今いまこそ明あきらかにしられたり。とも色々いろいろお言葉ことばは有りますが、明あきらかなお慈悲じひを明あきらかに貰もらうのです。暗くらい儘ままと教おしえる人ひとは晴はれたものではありません。親おやが承知しょうちじゃからお前まえ

は知しらんでもよいと教おしえる人ひとは、まだ親おやの味あじが本ほん当とうに判わからない人ひとです。十方じっぽうに満みちた大慈悲だいじひ

の親おやの一人子ひとりごにさして貰もらい、今いまが正定聚しょうじょうじゆの菩薩ぼさつにさして貰もらった嬉うれしさには喜よろこばずにはいられ
ません。

つづまる處ところ、私の儘ままが南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、身みも心こころも口くちも今いまは如来にょらいと一体いったいじや。此この御恩ごおんを

如何いかにして報ほうじようか。あらあら唯ただとはこの儘ままじやと踊おどり舞まい致いたします。広こう大だい難思なんしの慶心きやうしんと

は深ふかさや広ひろさの知しれない喜よろこびです。此この身みにさして下くださったお母様かあさまは、善知識ぜんぢしき、仏様ほとけさまの

化現けげんじや。御恩ごおんの程ほどを忘わする事ことは出来できません。

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。

別紙べつしは私わたしの定例布教じやうれいふきやうの日程にっていです。毎日まいにち毎夜まいよ活動かつどうしていますが、救すくわれた嬉うれしさに比くらべれば、

一寸ちよつとも御恩報謝ごおんほうしゃは出来できません。身みの続つづく限かぎり倒たおるる迄まですすみます。

兄様にいさま曾我そがの兄弟きやうだいの話はなしは忘わすれますまい。両親りやうしんの名なを挙あげるのも二人ふたりです。名なを汚けがすのも兄弟きやうだい

です。
兄は物質界に弟は精神界に何れが活躍するかと二人で涙流して誓った事は今猶脳裡に刻み付けられています。南無阿弥陀仏。

定例布教日程

一日 昼夜

二日 昼夜 寺町一丁目 敬行寺

三日 昼夜

五日 昼 中本町三丁目 谷口家

八日 東鉄町四丁目 末森家

十日 昼夜 通町六丁目 加米家

十二日 白川町二丁目 疋田家

十三日 新町十丁目 旭ガラス会

十四日 昼夜 新町十丁目 加治家

十五日 昼夜 新町十丁目 加治家

十六日 昼夜 新町十丁目 加治家

十八日 昼 寺町一丁目 敬行寺

十八日 岡田町二丁目 中村家

十九日

中央区

不定

二十日

諏訪町三丁目

些上家

廿一日

緑町三丁目

新田家

廿二日

岡田町三丁目

池田家

廿三日

北本町六丁目

原医院

廿五日

六条五丁目

松本家

廿六日

昼夜

門司市外

浄光寺

廿七日

昼夜

門司市外

浄光寺

廿八日

昼夜

門司市外

浄光寺

廿九日

春野町

田村家

三十日

東神願寺

知古島家

定例じょうれい以外いがいの日は、毎日まいにち臨時りんじで参まいりますから、一日いちにちも休やすみは有ありません。私わたしは法話ほうわも説教せつきょうも下手へたですが、信仰しんこうに悩なやむ求道者きゅうどうしやに話はなしますのは御飯ごはんより好すきで、法味楽ほうみらくは底そこの知しれない楽たのしみで、一切いっさいの物ものを忘わすれてしまいます。何卒なにとぞ御身御大切みごたいせつに遊あそばして早はやくお帰かえり下ください。皆々みなみなさま様様によろしく。合掌がつしょう。

12

親おやが泣なくぞ

同行同志があの人の信心は異安心じゃと言つて罵り合っているが、本当の異安心というものはどんなものか知っているのだろうか。頂かして貰ったと腰をすえていて、而も人が

悪くて自分が一番よい様に思ったり、何かに執われている間は、悉く方便の桁にいますので、

桁はずれの世界に出て不思議の仏智と、一体に融合した処を信楽開発というのじゃが、こん

な妙味の世界を覗こうともせず、求めもせず、唯々説教本読んで安心したのが信心と言う

が、頭は合点しても心が承知せん筈じゃ。そこに腰掛けていて、同行の悪口言うのじゃ。

その人達は真剣に生命の中枢、核心に触れる迄求めた事が有るじやろうか。極難信の金剛心

たいけん こと あ かえる な さわ た ねんぶつ どうぎようどうし ひばな

を体験した事が有るだろうか。蛙がガアク鳴くように騒ぎ立てるが 念仏の同行同志が火花

を散らせば親が泣くぞ。早く気が付いた方が救われた嬉しさを喜んでお念仏しようじやない

か。